

2. 情緒障害児の指導と治療に関する研究 (2)

－ 登校拒否児と緘黙児の追跡調査 －

小林 勝 荻部 良吉 長谷川 哲郎
武田 幸栄 後藤 駿介

3 か年計画の第 2 年次の報告である。第 1 年次の悉皆調査にあらわれた登校拒否児 271 名、緘黙児 247 名の 1 年後の状態について追跡調査を行った。
登校拒否児は小学校で約60％、中学校で約30％、高等学校で約15％の好転率であり、早期発見、早期治療の重要性などが指摘される。
緘黙児は低学年ほど好転率は高く、指導方針としては、担任との個人的な接触を基盤として、級友の協力によるグループ参加の重要性などが指摘される。

I 研究の目的

昭和53年度に実施した県内幼・小・中・高校を対象とした、登校拒否児、緘黙児についての調査にあらわれた当該児童生徒について、追跡調査を行い、状態の変化、指導の状況をあきらかにする。

II 研究の方法

- 1. 対象 昭和53年度の個別調査に回答のあったもののうち、卒業年次を除いた児童生徒（表 1 参照）
- 2. 期日 昭和54年 9 月10日現在
- 3. 内容 1 年後の実態について、質問紙により調査をする。（P 57, P 58参照）
なお、この調査は昭和47年度に実施したものと同一内容である。

（表 1） 調査対象、回収率、集計対象数

		幼稚園			小学校			中学校			高等学校			計		
		対象	回収	集計	対象	回収	集計	対象	回収	集計	対象	回収	集計	対象	回収	集計
登校拒否	男	4	4	2	48	41	39	61	57	53	44	37	14	157	139	108
	女	4	3	2	39	37	37	51	50	49	20	17	13	114	107	101
	計	8	7	4	87	78	76	112	107	102	64	54	27	271	246	209
	回収率	80.0			93.1			95.5			82.8			91.5		
緘黙	男	7	5	4	77	71	69	12	11	10	5	4	2	131	91	85
	女	12	10	10	106	103	97	25	25	25	3	2	2	146	140	134
	計	19	15	14	183	174	166	37	36	35	8	6	4	247	231	219
	回収率	78.9			95.0			97.2			75.0			93.5		

・集計対象は、回収された中から転校、退学、などの回答を除外した数である。

Ⅲ 調査の結果とその考察

1. 登校拒否について

本調査においては、対象児を、平井の「登校拒否の程度」を参考にして分類し、考察する。

- * 軽度 1. 家人が付き添ったり、教師や友人の誘導によって登校を始めるような例。
 (Ⅰ度) 2. 前夜に学校のしたくをしたり、その朝も玄関まで出てくるが、しきいをまたぐことをせずに引き返す。
 3. 本人の希望する玩具などを買い与えると、その当座は何日か学校へ行く。
 中等度 1. 朝は起きなくなり、起床を促すとそれに抵抗する。
 (Ⅱ度) 2. 起床の時間が次第に遅くなり、昼頃まで寝ているような状態になる。
 3. 起きている間は、自分の好きな遊びをしたり、趣味に属することなどを熱心にやる。
 4. 学校の話になると不快の情を示し、あるいは反抗的態度を表わす。
 5. 学校の学習は全くしない。
 重度 1. 昼は、ほとんど寝ている状態で、夕方に起きて食事をする。
 (Ⅲ度) 2. 全く気ままな生活をしている。
 3. 罵言を浴びせたり、激怒したり、物を投げたり、打ってかかったり、無理難題をいったりわめきちらしたりして、両親を困惑におとし入れる。
 4. 家から外へ出ようとしめない。
 5. 学校には全く無関心か、やめると言い出す。

今回の調査で回収したものを、校種別に程度の分布を示したものが表2である。幼稚園児の数は男子4名、女子3名であるが、うち、男子2名、女子1名がすでに退園し、残り4名であった。この4名は、いずれも明るく、元気で登園している。これらの園児に共通していたことは恥ずかしがりやで先生や友だちとなじめないことであった。さらに、親が、大した問題と考えずにいることのようなのである。しかし、担任がそれらをなんとか工夫してのりこえさせ、集団への適応を高めた子どもが明るく元気になった。このような概要であり、少人数でもあったため、以下の分析では園児を除いて考察してある。

(表2) 校種別程度分布

() 内の数字は校種ごとの百分率

	軽度(Ⅰ)		中等度(Ⅱ)		重度(Ⅲ)	
	男	女	男	女	男	女
小 学 校 (100.0)	27	20	9	13	5	4
	47 (60.3)		22 (28.2)		9 (11.5)	
中 学 校 (100.0)	13	23	23	15	21	12
	36 (33.6)		38 (35.6)		33 (30.8)	
高等学校 (100.0)	6	5	9	11	22	1
	11 (20.4)		20 (37.0)		23 (42.6)	
合 計 (100.0)	46	48	41	39	48	17
	94 (39.3)		80 (33.5)		65 (27.2)	

・小学校では、軽度が多く、中等度・重度と進むにしたがって少なくなっている。学年別に分類した場合は、表にはないが、高学年に中等度や重度が多い。

・中学校は中等度のものがやや多めであるが、各程度にそれほど差がない。しかし性別でみると、男子は中等度・重度が多く、女子は軽度が一位になっている。

・高等学校は、重度、中等度の順となる。性別差は、いっそう大きくなり、男子は重度に、女子は中等度にその大部分が集中し、中学校の段階がちょうど一段階進んだようすを呈する。

(1) 登校のようす（登校拒否は終了したか、継続しているか）

昭和53年4月から7月31日まで、登校拒否をおこし、あるいは継続していた対象児の1年後（昭和54年9月10日）の状況をまとめたものが表3-1である。この表の休学・転校、退学・除籍者は以後の集計より除かれ、入所（院）者は表9-1と9-2の中で再掲される。したがって、高等学校では、考察の対象児が半減する。表3-2では、出欠の状況を、校種別に分類しなおしたものである。

（表３－１） 出欠の状況 （ ）内は校種ごとの百分率

校 種	性 別	状 況 期 日	終 了			継続	転校 休学	退学 除籍	入所 入院
			53/12 ま で	54/3 ま で	54/7 ま で				
小 学 校	男	41	17	2	7	12	1	0	2
	女	37	11	9	4	12	1	0	0
	計	78 (100.0)	28 (35.8)	11 (14.1)	11 (14.1)	24 (30.8)	2 (2.6)	0 (0)	2 (2.6)
中 学 校	男	57	8	3	8	31	0	2	5
	女	50	7	7	4	24	1	0	7
	計	107 (100.0)	15 (14.0)	10 (9.4)	12 (11.2)	55 (51.4)	1 (0.9)	2 (1.9)	12 (11.2)
高 等 学 校	男	37	2	3	3	6	1	22	0
	女	17	3	4	2	4	0	4	0
	計	54 (100.0)	5 (9.3)	7 (13.0)	5 (9.3)	10 (18.5)	1 (1.8)	26 (48.1)	0 (0)
総 計	男	135	27	8	18	49	2	24	7
	女	104	21	21	10	39	2	4	7
	計	239 (100.0)	48 (20.1)	29 (12.1)	28 (11.7)	88 (36.8)	4 (1.7)	28 (11.7)	14 (5.9)

表３－１から、54年9月10日（調査日）まで、終了し、登校したものを校種ごとにみると、小学校で64.1％、中学校34.5％、高等学校では31.6％となっている。このことから、中学校、高等学校と進むにしたがって経過はよくないようである。なかでも、注目したいのは、高等学校では退学者が48.1％もあり、高等学校における登校拒否児の復帰のむずかしさを示している。

（表３－２） 校種程度別出欠状況 （ ）内は校種ごとの百分率

状 況	校 種	小 学 校						中 学 校						高 等 学 校					
		軽 度		中 等 度		重 度		軽 度		中 等 度		重 度		軽 度		中 等 度		重 度	
		男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
継 続		7	6	3	4	2	2	5	7	15	11	11	6	0	0	4	4	2	0
		13		7		4		12		26		17		0		8		2	
		(17.6)		(9.4)		(5.4)		(13.0)		(28.3)		(18.4)		(0)		(29.7)		(7.4)	
終 了	53/12 ま で	11	6	3	4	3	1	3	6	3	0	2	1	1	3	0	0	1	0
		17		7		4		9		3		3		4		0		1	
		(23.0)		(9.4)		(5.4)		(9.8)		(3.3)		(3.3)		(14.8)		(0)		(3.7)	
	54/3 ま で	2	5	0	3	0	1	1	5	2	0	0	1	1	0	0	4	2	0
		7		3		1		6		2		1		1		4		2	
		(9.5)		(4.1)		(1.4)		(6.5)		(2.2)		(1.1)		(3.7)		(14.8)		(7.4)	
	55/7 ま で	6	2	1	2	0	0	1	3	2	1	5	1	1	1	2	1	0	0
		8		3		0		4		3		6		2		3		0	
		(10.7)		(4.1)		(0)		(4.3)		(3.3)		(6.5)		(7.4)		(11.1)		(0)	
	計	26	19	7	13	5	4	10	21	22	12	18	9	3	4	6	9	5	0
		45		20		9		31		34		27		7		15		5	
		(60.8)		(27.0)		(12.2)		(33.6)		(37.1)		(29.3)		(25.9)		(55.6)		(18.5)	

表３－２から、54年9月10日（調査日）まで、終了し、登校したものを、程度別にみると、小学校の軽度が43.2％、中等度17.6％、重度6.8％となる。

中学校は、軽度20.6％、中等度8.8％、重度10.9％であり、高等学校では、軽度25.9％、中等度25.9％、重度11.1％の復帰となるが、高等学校では、半数以上の退学者が除かれているので、実際の復帰の割合は、さらに低いものであると考えられる。

・小・中・高等学校を通して言えることは、程度が進むにしたがって、復帰の率は悪くなり、当然のことながら、早期発見、早期治療がきわめて大切であり、小学校段階における根本的解決などが、重要な指導の要点となりそうである。さらに、中学校、高等学校においては、早期における指導をどのようにするかなどが、課題といえよう。

(2) 変容の状況

（表4-1） 変容の状況（1） （数字は実数）

校	表情・態度 欠席状況	程度										重 度（Ⅲ）				
		軽 度（Ⅰ）					中 等 度（Ⅱ）									
		1. 非常に明るく	2. 明るくなった	3. 変わらない	4. 暗くなった	5. その他	1. 非常に明るく	2. 明るくなった	3. 変わらない	4. 暗くなった	5. その他	1. 非常に明るく	2. 明るくなった	3. 変わらない	4. 暗くなった	5. その他
小学校	a. ほとんど欠席しない	6	25	3	0	0	1	9	0	0	0	0	6	0	0	0
	b. 欠席は少なくなった	1	5	2	0	0	0	6	1	0	0	1	1	0	0	0
	c. 変らない	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	d. 欠席が多くなった	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	e. 全く出席しない	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
中学校	a. ほとんど欠席しない	8	8	1	0	0	1	6	0	0	0	3	5	0	0	0
	b. 欠席は少なくなった	1	5	0	0	0	0	6	1	0	0	0	2	2	0	0
	c. 変らない	0	1	4	0	0	0	3	9	0	0	0	0	5	0	0
	d. 欠席が多くなった	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
	e. 全く出席しない	0	0	1	0	0	0	1	5	0	1	1	3	4	0	1
高等学校	a. ほとんど欠席しない	1	5	0	0	0	1	4	0	0	0	0	2	0	0	0
	b. 欠席は少なくなった	0	0	1	0	0	0	4	1	0	1	0	1	0	0	0
	c. 変らない	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0
	d. 欠席が多くなった	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	e. 全く出席しない	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0

対象児が、どのように変容したかを整理したものが、表4-1である。ここでは、欠席の状況および学級担任の観察による表情・態度の変化の二面からとらえている。しかし、この観察による、表情・態度

程 度	欠 席 の 状 況	人 数 (%)
軽 度 (83名)	a. ほとんど欠席しない	57 (68.6)
	b. 欠席は少なくなった	15 (18.2)
	c. 変らない	6 (7.2)
	d. 欠席が多くなった	4 (4.8)
	e. 全く出席しない	1 (1.2)
中 等 度 (69名)	a. ほとんど欠席しない	22 (31.8)
	b. 欠席は少なくなった	20 (29.0)
	c. 変らない	16 (23.2)
	d. 欠席が多くなった	3 (4.4)
	e. 全く出席しない	8 (11.6)
重 度 (41名)	a. ほとんど欠席しない	16 (39.0)
	b. 欠席は少なくなった	7 (17.1)
	c. 変らない	5 (12.2)
	d. 欠席が多くなった	1 (2.4)
	e. 全く出席しない	12 (29.3)

表4-1を、さらに、欠席状況、a、b、cと表情・態度の1、2の範囲にあるもの、および、欠席状況、a、bと表情・態度の3の範囲にあるものを好転群、欠席状況、表情・態度とも変わらないものを不変群、その他を悪化群、として分類整理したものが、表4-3である。ここでは、校種ごとの特徴、性別の差異なども見れるように配慮した。

度の判断で、2、3、4あたりで、迷ったことを述べている担任もあり、登校拒否児が、場所と日によって、その表情・態度に差異がみられたようである。

表4-1から、程度別に、欠席の状況を集約してみたのが表4-2である。当然のことながら、軽度のもの欠席状況は好転率が高くなっている。重度におけるa（ほとんど欠席しない）の率は高いが、これは、高校生に重度が多く、それらの大半が退学したことを考慮に入れて見る必要があろう。それにしても、重度のe（全く出席しない）の29.3％は、登校拒否児の慢性化は、いかに復帰がむずかしいかを示しているようである。

・小学校における好転群は多く、68名（91.8％）となる。したがって、この調査に限り言えば、小学校においては大部分のものが好転していくと考えてよさそうである。それだけに、小学校時代に、根本的治療にむけて指導していくことが大切のようである。

・中学校になると、好転群は52名（56.5％）となる。軽度のものは、かなり好転者も多いが、中等・重度になるとその率は急激に低くなっている。重度においては、悪化群に10名おり、これは率にして37.0％と高い。中学校における治療・指導のむずかしさを示している。性別では男子は中等度に、女子は軽度に多かったので、やはり女子の方が、5.5％好転率が高くなっている。

・高等学校は、退学者などが27名と全体の48.1％になり（表3-1）、これらを除くので、好転群21名（77.8％）となるが、退学者などの実態が把握できないので、実際のところは推測し難い。しかし、退学者などを、復帰出来なかったものとして考えるなら、高等学校における登校拒否の治療・指導が、いかに困難な条件下にあるかがうかがえる。

（３）変化のきっかけ・理由

好転したにせよ、悪化したにせよ、そのきっかけや理由をどうみるか、について、文章表現で記述したものを、① 他機関との協力によるとするもの、② 学校・学級担任の指導によるとするもの、③ 家庭環境・家族関係の変化によるとするもの、④ 本人の自覚によるとするものに分類し、それぞれの程度ごとに、好転群、不変・悪化群ごとに整理したのが、表5-1（男子）、表5-2（女子）である。小学校においては、男・女間に大きな差異がみられたので男、女に分けて整理した。

なお、表中、強、受とあるのは対象児に対する担任教師の指導の姿勢を示し、強は強制的態度、受は受容的態度で、調査用紙の4の（１）、（２）を参考に決定した。また、1人で複数のきっかけがあったり、きっかけがわからないと答えたものもあった、したがって、各校種ごとに実人数をのせてある。

・小学校の好転群で、男子は学校・学級担任の指導によるものとするのが65.5％（19名）であるが、女子では本人の自覚によるが、48.8％（20名）となっており、きっかけのとらえかたが、男女でかなり違っている。

（表4-3） 変容の状況（2）

（ ）内は程度ごとの百分率

校	程度	変化 性	好 転		不 変		悪 化	
			男	女	男	女	男	女
小 学 校 (七四名)	軽 度		25	17	1	0	0	2
	計		42		1		2	
	(100.0)		(93.4)		(2.2)		(4.4)	
	中 等 度		6	12	0	0	1	1
	計		18		0		2	
	(100.0)		(90.0)		(0)		(10.0)	
中 学 校 (九二名)	重 度		4	4	0	0	1	0
	計		8		0		1	
	(100.0)		(88.9)		(0)		(11.1)	
	軽 度		8	16	1	3	1	2
	計		24		4		3	
	(100.0)		(77.4)		(12.9)		(9.7)	
高 等 学 校 (二七名)	中 等 度		11	5	7	2	4	5
	計		16		9		9	
	(100.0)		(47.0)		(26.5)		(26.5)	
	重 度		8	4	3	2	7	3
	計		12		5		10	
	(100.0)		(44.5)		(18.5)		(37.0)	
高 等 学 校 (二七名)	軽 度		3	4	0	0	0	0
	計		7		0		0	
	(100.0)		(100.0)		(0)		(0)	
	中 等 度		3	8	1	1	2	0
	計		11		2		2	
	(100.0)		(73.4)		(13.3)		(13.3)	
高 等 学 校 (二七名)	重 度		3	0	0	0	2	0
	計		3		0		2	
	(100.0)		(60.0)		(0)		(40.0)	

この傾向は、中学校においてもあり、本人の自覚によるとするものが、男子では6.9%（2名）なのに対し、女子は、39.3%（11名）である。しかし、高等学校になるとその差はみられなくなる。

中学校の男子では、好転群で、他機関との協力とするものが、37.9%（11名）あり、ついで、学校・学級担任の指導によるとするものが34.5%（10名）である。女子では、学校・学級担任の指導とするものが42.9%（12名）となる。その他に、家庭環境・家族関係の変化によるとするものは、小学校の女子で一番高く、22.0%（9名）であり、中・高校では、13%前後となっている。

なお、不変群や悪化群については、記述が少なかった上に、きっかけについては、まったくわからないと答えたものも数多くあった。

・担任教師の姿勢では、受容的態度が多くみられ、男子では、小・中・高等学校とも3：1ぐらいの割合で受容的態度を取る教師の方が多くなっている。女子では、小学校において、ほとんどが受容的態度であるのに対し、中学校は2：1の割合になり、かなり強制的態度が増えてきている。しかし高等学校では、また受容的態度が多くみられる。

ところで、このような受容的態度ときっかけ・理由との関係となるとなともいえない。

（表5-1） 変化のきっかけ（男子） （数字は頻数）

校	き	っ	け	程度				中 等 度 (Ⅱ)				重 度 (Ⅲ)			
				軽 度 (Ⅰ)				好 転				好 転			
				好	転	不変・悪化	好	転	不変・悪化	好	転	不変・悪化	好	転	不変・悪化
小	学	校	1. 他機関	0	1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0
			2. 学 校	2	12	0	0	1	3	0	1	0	1	0	1
			3. 家 庭	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
			4. 自 覚	1	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
			計	3	17	0	0	3	3	0	1	2	1	0	1
			実人数	4	21	1	0	3	3	0	1	2	2	0	1
中	学	校	1. 他機関	0	1	0	0	2	4	2	1	3	1	0	3
			2. 学 校	2	4	0	0	1	2	0	1	0	1	0	2
			3. 家 庭	1	0	0	0	0	3	0	1	1	1	0	0
			4. 自 覚	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0
			計	3	5	0	0	3	9	2	3	5	4	0	5
			実人数	3	5	2	0	3	8	7	4	3	5	2	8
高	等	学	1. 他機関	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
			2. 学 校	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
			3. 家 庭	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
			4. 自 覚	1	0	0	0	0	3	0	0	1	1	0	0
			計	1	2	0	0	0	3	0	0	2	4	0	0
			実人数	1	2	0	0	0	3	0	3	1	2	0	2

（表5-2） 変化のきっかけ（女子） （数字は頻数）

校	き	っ	け	程度				中 等 度 (Ⅱ)				重 度 (Ⅲ)			
				軽 度 (Ⅰ)				好 転				好 転			
				好	転	不変・悪化	好	転	不変・悪化	好	転	不変・悪化	好	転	不変・悪化
小	学	校	1. 他機関	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
			2. 学 校	0	5	0	0	1	3	0	0	0	1	0	0
			3. 家 庭	0	6	0	1	0	1	0	0	1	1	0	0
			4. 自 覚	1	11	0	0	0	6	0	1	1	1	0	0
			計	1	22	0	1	1	11	0	1	2	4	0	0
			実人数	1	16	1	1	1	11	0	1	1	3	0	0
中	学	校	1. 他機関	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
			2. 学 校	4	6	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0
			3. 家 庭	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
			4. 自 覚	1	4	0	0	1	2	0	0	2	1	0	0
			計	7	12	0	2	1	4	0	0	2	2	0	1
			実人数	5	11	0	5	1	4	2	5	2	2	0	5
高	等	学	1. 他機関	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
			2. 学 校	0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
			3. 家 庭	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
			4. 自 覚	0	2	0	0	0	5	0	0	0	0	0	0
			計	1	3	0	0	1	9	0	0	0	0	0	0
			実人数	1	3	0	0	1	7	0	1	0	0	0	0

(4) 対象児に対する指導の手だて

(ア) 指導方針

学級担任が、対象児に対して、どのような方針・構えで指導にあたったかについて文章表現で記述したものを、① 自信を持たせる、② 自覚を促す、③ 学級のふんい気づくり、④ 学校体制であたる⑤ 家庭との連携を強める、に分類し、校種別、程度別、好転、不変・悪化群別に整理したものが、表 6-1 である。また、1 人の対象児に、複数の方針が立てられたものもあるので、実人数も載せてある。

(表 6-1) 指導の方針 (数字は頻数)

校 種	方 針	程 度				中 等 度 (Ⅱ)				重 度 (Ⅲ)			
		軽 度 (Ⅰ)		不 変・悪 化		好 転		不 変・悪 化		好 転		不 変・悪 化	
		好 転	受 強	好 転	受 強	好 転	受 強	好 転	受 強	好 転	受 強	好 転	受 強
小 学 校	1. 自 信	1	19	1	1	3	10	0	2	0	0	0	1
	2. 自 覚	4	4	0	0	1	2	0	0	1	3	0	0
	3. 学 級	0	14	0	0	0	2	0	0	1	2	0	0
	4. 体 制	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0
	5. 家 庭	1	5	1	0	1	2	0	1	1	0	0	0
	計	6	42	2	1	5	16	0	3	4	5	0	1
中 学 校	実人数	5	37	2	1	4	14	0	2	3	5	0	1
	1. 自 信	1	9	0	0	0	4	1	0	1	4	0	3
	2. 自 覚	5	4	0	3	3	5	2	4	2	2	1	8
	3. 学 級	1	5	0	3	1	7	2	1	0	1	0	2
	4. 体 制	0	0	1	0	0	0	2	2	2	1	0	4
	5. 家 庭	2	3	1	0	1	3	5	4	1	1	1	2
高 等 学 校	計	9	21	2	6	5	19	12	11	6	9	2	19
	実人数	8	16	2	5	4	12	9	9	5	7	2	13
	1. 自 信	0	2	0	0	0	9	0	2	1	0	0	1
	2. 自 覚	2	0	0	0	1	1	0	2	0	2	0	1
	3. 学 級	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	4. 体 制	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高 等 学 校	5. 家 庭	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	計	2	6	0	0	1	11	0	4	1	2	0	2
	実人数	2	5	0	0	1	10	0	4	1	2	0	2

・校種別に指導の方針をみると、小学校では、自信を持たせる、44.7% (38名)、学級のふんい気づくり、22.4% (19名) が上位であり、中学校では、自覚を促す、32.3% (39名) が多く、他の(1), (3), (5)の項目は、それぞれ、19.0%, 19.0%, 19.8% と同じような割合となっており、中学校においては、さまざまな方針を模索しながら、指導にあたっている様子がみえる。それは、実人数と方針の頻数差異が小学校や高等学校に比較して多いのをみてもわかる。つまり、1 人の生徒に複数の方針を試みているわけである。

高等学校では、自信を持たせる 51.8% (15名)、自覚を促す、31.0% (9名) がほとんどで、本人へのかかわりを主体として方針を立て、自立を期待していることがうかがえる。しかし、軽度の者に対しては、学級のふんい気づくりにも配慮している。

・程度別の特徴を見やすくするために、さらに集約

したものが、表 6-2 である。

自信を持たせるでは軽度、中等度でそれぞれ 35.0%, 35.3% であり一番多い。ところが重度では自覚を促すが、39.2% と一位になる。学級のふんい気づくりは、軽度に多くみられるし、学校体制であたるでは、中等度の不変・悪化群と重度に目立つ。家庭との連携を強めるは、中等度でやや多いが、各程度ともに方針として考慮されている。

(表 6-2) 指導の方針 () 内は程度ごとの百分率

程 度	軽 度 (Ⅰ)				中 等 度 (Ⅱ)				重 度 (Ⅲ)			
	好 転		不 変・悪 化		好 転		不 変・悪 化		好 転		不 変・悪 化	
	強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	強	受
1. 自 信	2 (2.1)	30 (30.9)	1 (1.0)	1 (1.0)	3 (3.5)	23 (26.1)	1 (1.2)	4 (4.5)	2 (3.9)	4 (7.8)	0 (0)	5 (9.8)
2. 自 覚	11 (11.3)	8 (8.2)	0 (0)	3 (3.1)	5 (5.8)	8 (9.1)	2 (2.4)	6 (6.8)	3 (5.9)	7 (13.7)	1 (2.0)	9 (17.6)
3. 学 級	1 (1.0)	22 (22.8)	0 (0)	3 (3.1)	1 (1.2)	9 (10.2)	2 (2.4)	1 (1.2)	1 (2.0)	3 (5.9)	0 (0)	2 (3.9)
4. 体 制	0 (0)	0 (0)	1 (1.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	2 (2.4)	2 (2.4)	3 (5.9)	1 (2.0)	0 (0)	4 (7.8)
5. 家 庭	3 (3.1)	9 (9.3)	2 (2.1)	0 (0)	2 (2.4)	6 (6.8)	5 (5.8)	5 (5.8)	2 (3.9)	1 (2.0)	1 (2.0)	2 (3.9)

・程度、変化群の区別なく、① 自信を持たせる、③ 学級のふんい気づくりの項では、受容的構えをとる教師に多くみられた。

指導の方針においては、それぞれ校種別、程度別に工夫し、方針を立てていることがうかがえる。

(イ) 直接的働きかけ

学級担任教師が対象児に対して、直接的にはどのように登校を促したかについての記述を ① 教師による直接誘導（教師が迎えに行くなど） ② 友人による誘導（友人がつれてくる。友人を迎えにやるなど） ③ 父兄による誘導（父兄がつれてくるなど） ④ その他の指導（面接、なかまづくりなど）に分類し、整理したのが表7である。

小学校では、その他の指導が54.1%（40名）、高等学校では、さらに高く71.4%（20名）となり、それぞれ一位であるが、中学校では教師による直接誘導が40.9%（47名）と一番多い。ついでその他の指導、32.2%（37名）となり、友人による誘導も、20.0%（23名）で、小学校13.5%（10名）より高率である。ここでも、中学校では多様化した働きかけをしていることがわかり、指導の複雑さをのぞかせている。

ところで、総体的に一番多い、④その他の指導の内容に興味がもたれる。おもなものを列挙すると、

- ・小学校では、みんなの前ではめてやる・個人的に楽しいことの話しあい・日記で心の交流・リーダー的な仕事をさせる・クラブ活動に励まさせる・仲良しと同じクラスにする・手紙のやりとりをする・発言の機会を与える・帰るときに気持ちをほぐしてやる。

- ・中学校では、本人へ話しかけ孤独感を持たせない・学習で負担にならないようにする・日記を通して心の訴えをきく・部活を通して、学校生活に張りを持たせる・趣味などを通して交流を持つ・全職員から、明るく声をかけてもらう・保健室で過ごさせ、養護教諭との接触を多くする・徐々に学校に近づける・学級の係活動を一生懸命やらせる・朝早く校門まで来る練習。

- ・高等学校では、教室に入りやすい座席にする・電話で話し合う・全教科の先生から遅れなどについて理解してもらう・教室以外のところで手伝いをさせる・相談担当の先生から面接を継続してもらう・登校練習をする（担任の自宅へ来る、校門まで行く、保健室へ入るなど）・読書をすすめ感想を話し合ったりする・規律正しい生活習慣を身につけさせる・不安や困惑の感情を十分にくみとる・近くの山へ、ハイキングにつれ出す・趣味について話したり、研究したりする。過去のことは、一切、ふれないようにした、などであった。

（表7） 直接的働きかけ

校種	働きかけ 変化 の 傾向	程度				中等度(Ⅱ)				重 度(Ⅲ)			
		軽 度(Ⅰ)				好 転				好 転			
		好	転	不変・悪化	強 受	好	転	不変・悪化	強 受	好	転	不変・悪化	強 受
小 学 校	1. 教師	1	7	1	0	1	3	0	0	0	1	0	0
	2. 友人	1	5	0	1	0	3	0	0	0	0	0	0
	3. 父兄	3	3	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0
	4. 指導	0	22	0	0	1	8	0	2	2	4	0	1
	計	5	37	2	1	4	14	0	2	3	5	0	1
中 学 校	実人数	5	37	2	1	4	14	0	2	3	5	0	1
	1. 教師	5	7	2	0	3	4	5	3	2	5	2	9
	2. 友人	2	1	0	1	1	5	3	1	1	0	0	8
	3. 父兄	0	2	0	0	0	1	2	0	1	2	0	0
	4. 指導	2	7	0	4	1	6	3	6	1	2	0	5
高 等 学 校	計	9	17	2	5	5	16	13	10	5	9	2	22
	実人数	8	16	2	5	4	12	9	9	5	7	2	13
	1. 教師	0	0	0	0	1	2	0	0	1	0	0	0
	2. 友人	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
	3. 父兄	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0
小 学 校	4. 指導	1	5	0	0	0	7	0	3	0	2	0	2
	計	2	5	0	0	1	11	0	4	1	2	0	2
	実人数	2	5	0	0	1	10	0	4	1	2	0	2

（５） 家庭との協力

家庭との協力をどのようにしているかについての記述を、① 保護者との話し合いを中心としている、② 話し合うというよりも連絡だけで終わっている、に分類したのが表８である。

・それぞれが、家庭とのかかわりをもとうとしているようすがうかがわれるが、受容的態度をとる教師群に単なる連絡だけでなく、話し合いを重ねるという者が多い、小学校で51.4％（38名）、中学校43.5％（40名）、高等学校66.7％（18名）が、その全体に対する割合である。

・話し合いの程度などについては把握し難く、不明であるが、方法については次のようなものが目立った。学校に定期的に情報を知らせに來たり、対策を考えたりする、担任以外の者（教頭、生活指導主任、養護教諭など）と面接する、家庭訪問により話し合いをする、などであった。

（表８） 家庭との協力の態様（数字は実人数）

校 種		協力	程度 変 化 勢 勢	軽 度 (Ⅰ)				中 等 度 (Ⅱ)				重 度 (Ⅲ)				計
				好 転		不 変 化		好 転		不 変 化		好 転		不 変 化		
				強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	
				強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	
小 学 校	1. 話し合い	1	26	1	1	0	5	0	2	1	3	0	1	41		
	2. 連絡のみ	4	11	1	0	4	9	0	0	2	2	0	0	33		
	計	5	37	2	1	4	14	0	2	3	5	0	1	74		
中 学 校	1. 話し合い	4	9	1	1	2	8	3	4	4	6	1	12	55		
	2. 連絡のみ	4	7	1	4	2	4	6	5	1	1	1	1	37		
	計	8	16	2	5	4	12	9	9	5	7	2	13	92		
高 等 学 校	1. 話し合い	1	4	0	0	0	9	0	3	1	1	0	1	20		
	2. 連絡のみ	1	1	0	0	1	1	0	1	0	1	0	1	7		
	計	2	5	0	0	1	10	0	4	1	2	0	2	27		

（６） 他機関との協力

他の専門機関とどのような連携、協力をとったかについて、校種別、程度別に整理したのが表９－１と表９－２である。ここでは、それぞれ全調査数を基準として、校種別・程度別に百分率を求めてある。なお表中の種類の入所（院）とは、短期間治療機関、福祉施設や病院等への入所、入院をさし、通所（院）とは以上の機関への通所、通院をさす。また訪問指導とは、学校以外の機関（児童相談所、福祉事務所等）の家庭訪問による指導をさす。

・全調査数を基準にしての専門機関とのかかわりをみると小学校で28.2％（22名）、中学校66.4％（71名）、高等学校24.1％（13名）となり、中学校段階でのかかわりが群を抜いている。男女別では小・中学校には大差がなく、高等学校でやや女子が多くなっている。

小学校では、学校とのかかわりでなんとか指導・治療に努力しているが、中学校では、その限界があり、どうしても専門機関の援助を求めるケースが多く、問題の困難さやうかがわせる。高等学校では、適切な入所（院）施設は少なく、長期にわたると退学してしまう場合がほとんどであるため、割合としては低くなっている。また、高校生が利用出来る専門機関も数少ないためであろう。

（表９－１） 専門機関による指導・治療（校種別）

種 類	時 期	性 別	小 学 校		中 学 校		高 等 学 校		計	
			男	女	男	女	男	女	男	女
			過去	現在	過去	現在	過去	現在	過去	現在
入所(院)	過去		2	1	7	2	0	2	9	5
	現在		2	0	5	7	0	0	7	7
	計		5 (6.4)		21 (19.6)		2 (3.7)		28 (11.7)	
通所(院)	過去		4	8	9	13	4	4	17	25
	現在		2	1	8	7	0	3	10	11
	計		15 (19.2)		37 (34.6)		11 (20.4)		63 (26.4)	
訪問指導	過去		3	3	9	10	0	2	12	15
	現在		0	0	7	4	1	0	8	4
	計		6 (7.7)		30 (28.0)		3 (5.6)		39 (16.3)	
計	過去		13	13	45	43	5	11	63	67
	現在		26 (33.3)		88 (82.2)		16 (29.7)		130 (54.4)	
	計		39		133		21		193	
実人数	過去		12	10	36	35	5	8	53	53
	現在		22		71		13		106	
全調査数			78		107		54		239	

(表9-2) 専門機関による指導・治療（程度別）・程度別にみた場合、程度が進むにつれてかわりが多い

種類	時期	程度 軽度 (Ⅰ)		中等度 (Ⅱ)		重度 (Ⅲ)	
		男	女	男	女	男	女
入所 (院)	過去	0	1	4	3	5	1
	現在	3	1	3	3	1	3
	計 (%)	5 (5.3)		13 (16.3)		10 (15.4)	
通所 (院)	過去	3	10	7	10	8	5
	現在	2	4	3	5	4	2
	計 (%)	19 (20.2)		25 (31.3)		19 (29.2)	
訪問指導	過去	2	7	5	5	5	3
	現在	0	0	2	3	6	1
	計 (%)	9 (9.6)		15 (18.8)		15 (23.1)	
合 計 (%)		10 23 (35.1)		24 29 (66.4)		29 15 (67.7)	
実 人 数		10 16 26		21 25 46		22 12 34	
合 調 査 数		94		80		65	

なっている。合計の割合では、軽度で35.1%であるが、中等度、重度ではそれぞれ、66.4%、67.7%となる。

種類ごとでは、入所（院）と通所（院）は、中等度に多く、訪問指導は重度が高い、家にひきこもってしまう者が重度には目立つようである。しかし、中等度と重度の差異はそれほど大きいものとはいえない。

中等度以上になると、その指導の困難さから、やはり、専門機関を頼り、その指導や治療を受けるものが、平均で67.1%にあたるということは、登校拒否児の指導に、かなり多くの関係者が不安を抱いていることを示している。

表9-3は、専門関係機関とかかわりをもった対象児の予後をみたものである。

・小学校では好転率は高く、95.2%、中学校で62.0%、高等学校で83.3%になる。高等学校では退学者等が除かれているため高率となっているが、退学者の内容が気になるところである。

・種類別にみると入所（院）での好転率が一番高く78.6%、ついで訪問の74.1%、通所（院）71.4%となる。なお、数字は頻数であるため、小・中学校でそれぞれ7つ、高等学校で10の重なりがある。つまり何人かの対象児が、2つ以上の指導・治療を受けていることである。

(表9-3) 専門機関による指導・治療の予後 () 内は種類ごとの百分率

種類	時期	小学校		中学校		高等学校		計
		好転・ 20名	不変 悪化 1名	好転 31名	不変 悪化 19名	好転 10名	不変 悪化 2名	
入所 (院)	過去	3 (21.4)	0 (0)	6 (42.9)	3 (21.4)	2 (14.3)	0 (0)	14 (100.0)
	現在	11 (26.2)	1 (2.4)	12 (28.5)	10 (23.8)	7 (16.7)	1 (2.4)	42 (100.0)
通所 (院)	過去	6 (22.2)	0 (0)	13 (48.2)	6 (22.2)	1 (3.7)	1 (3.7)	27 (100.0)
	現在							

(7) 今後の見とおし

(表10) 今後の見とおしの群別比較 (数字は実数) 学級担任教師からみた対象児の今後についての記述を整理したのが、表10である。

見 通 し	程度 変化 姿勢	軽 度 (Ⅰ)				中 等 度 (Ⅱ)				重 度 (Ⅲ)				計
		好 転		不 変		好 転		不 変		好 転		不 変		
		強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	
		強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	強	受	
小 学 校	明るい	1	27	0	1	2	12	0	1	1	3	0	1	49
	暗い	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
	不明	4	9	1	0	2	2	0	1	2	2	0	0	23
	無 答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中 学 校	明るい	7	12	1	0	4	8	1	0	5	5	0	4	47
	暗い	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	1	3	8
	不明	1	4	1	4	0	4	8	6	0	2	1	6	37
	無 答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
高 等 学 校	明るい	2	5	0	0	0	10	0	1	1	2	0	1	22
	暗い	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	2
	不明	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0	0	0	3
	無 答	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

・好転群の予後の見とおしの明るいのは当然のことながら不明と答えた率が、小学校で31.1%（23名）、中学校で40.2%（37名）、高等学校で11.1%（3名）となり、退学者を除いた高等学校は別としても、まだ、かなり、その見とおしに不安を抱いていることがわかる。それは、登校拒否という現象がたとえ消えたとしても、なお、根本的な本質が解決されていないと判断されているためであろう。

2. 緘黙児について

(1) 緘黙の状況、程度

(表11) 緘黙の状況・程度

数字は実数, () は%

校種	性	対人 程度 (人数)	A 誰に対しても					B 担任に対して					C 友人に対して					D 家族に対して				
			1 たい話す 思うことを だ	2 小声で何と か話す	3 返事くらい なら	4 出さない うなづくが 声は	5 全く反応を 示さない	1 たい話す 思うことを だ	2 小声で何と か話す	3 返事くらい なら	4 出さない うなづくが 声は	5 全く反応を 示さない	1 たい話す 思うことを だ	2 小声で何と か話す	3 返事くらい なら	4 出さない うなづくが 声は	5 全く反応を 示さない	1 たい話す 思うことを だ	2 小声で何と か話す	3 返事くらい なら	4 出さない うなづくが 声は	5 全く反応を 示さない
幼稚園	男	4	2	0	1	1	0	2	1	1	0	0	2	1	0	1	0	4	0	0	0	0
	女	10	1	4	2	0	0	3	3	3	0	0	5	3	1	0	0	8	0	1	0	0
	計	14 (100)	3 (21.4)	4 (28.6)	3 (21.4)	1 (7.1)	0	5 (35.7)	4 (28.6)	4 (28.6)	0	0	7 (50.0)	4 (28.6)	1 (7.1)	1 (7.1)	0	12 (85.6)	0	1 (7.1)	0	0
小学校	男	69	4	10	13	16	5	20	21	4	21	3	25	14	5	13	3	60	5	0	0	0
	女	97	5	11	8	32	7	11	33	15	33	5	25	27	9	26	4	85	4	2	1	0
	計	166 (100)	9 (6.0)	21 (12.6)	21 (12.6)	48 (28.9)	12 (7.2)	31 (18.7)	54 (32.5)	19 (11.4)	54 (32.5)	8 (4.8)	50 (30.1)	41 (24.7)	14 (8.4)	39 (23.5)	7 (4.2)	145 (87.3)	9 (6.0)	2 (1.2)	1 (0.6)	0
中学校	男	10	0	3	0	2	1	2	4	1	3	0	0	5	4	0	1	7	2	0	0	0
	女	25	1	4	3	9	2	6	6	5	8	0	9	6	1	9	0	20	4	0	1	0
	計	35 (100)	1 (2.9)	7 (20.0)	3 (8.6)	11 (31.4)	3 (8.6)	8 (22.9)	10 (28.6)	6 (17.1)	11 (31.4)	0	9 (27.3)	11 (31.4)	5 (14.3)	9 (27.3)	1 (2.9)	27 (77.1)	6 (17.1)	0	1 (2.9)	0
高等学校	男	2	1	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0
	女	2	0	2	0	0	0	1	1	0	0	0	2	0	0	0	0	1	0	1	0	0
	計	4 (100)	1 (25.0)	3 (75.0)	0	0	0	2 (50.0)	2 (50.0)	0	0	0	2 (50.0)	2 (50.0)	0	0	0	3 (75.0)	0	1 (25.0)	0	0
総計	男	85 (100)	7 (8.2)	14 (16.5)	14 (16.5)	19 (22.4)	6 (7.1)	25 (29.4)	27 (33.7)	6 (7.1)	24 (28.2)	3 (3.5)	27 (33.7)	22 (25.9)	9 (10.6)	14 (16.5)	4 (4.7)	73 (85.9)	7 (8.2)	0	0	0
	女	134 (100)	7 (5.2)	21 (15.7)	13 (9.7)	41 (30.6)	9 (6.7)	21 (15.7)	43 (32.1)	23 (17.2)	41 (30.6)	5 (3.7)	41 (30.6)	36 (26.9)	11 (8.2)	35 (26.1)	4 (3.0)	114 (85.0)	8 (6.0)	4 (3.0)	1 (0.7)	0
	計	219 (100)	14 (6.4)	35 (16.0)	27 (12.3)	60 (27.4)	15 (6.8)	46 (21.0)	70 (32.0)	29 (13.3)	65 (29.7)	8 (3.7)	68 (31.1)	58 (26.5)	20 (9.1)	49 (22.4)	8 (3.7)	187 (85.4)	15 (6.8)	4 (1.8)	1 (0.5)	0

対人別に話ができる程度、状態を調べたものである。

。「誰に対しても」ということでは十分な情報もないためか回答が少ない。小・中学校では「声を出さない」というのが多く、幼稚園、高校では「声を出す」「話をする」が多い。

。「担任に対して」は、小・中学校でも「何とか話す」ことができるものが50%を越えている。しかし、「声も出さない」ものが、小学校で37.3%, 中学校で31.4%である。

昨年度の調査では「全く話をしない」ものが小学校で50.9%, 中学校で37.3%であったことから考えると小学校ではかなりの変化がみられるが、中学校では大きな変化がなかったようである。

。「友人に対して」も「話ができる」と考えられるものが、小学校で63.2%, 中学校で73.0%である。これは昨年度では小学校で55.5%, 中学校で69.8%となっており、わずかではあるが、小・中学校と

(表12) 変容の状態 数字は実数, () は%

			ア	イ	ウ	エ
幼稚園	男	4	2	1	1	0
	女	10	3	7	0	0
	計	14	5	8	1	0
		(100)	(35.7)	(57.1)	(7.1)	
小学校	男	69	13	36	18	1
	女	97	18	55	22	2
	計	166	31	91	40	3
		(100)	(18.7)	(54.9)	(24.1)	(1.8)
中学校	男	10	2	5	2	1
	女	25	0	18	6	1
	計	35	2	23	8	2
		(100)	(5.7)	(65.6)	(22.9)	(5.7)
高等学校	男	2	1	1	0	0
	女	2	0	2	0	0
	計	4	1	3	0	0
		(100)	(25.0)	(75.0)		
計	男	85	18	43	21	2
		(100)	(21.2)	(50.6)	(24.7)	(2.4)
	女	134	21	82	28	3
		(100)	(15.7)	(61.2)	(20.9)	(2.2)
	計	219	39	125	49	5
		(100)	(17.8)	(57.0)	(22.4)	(2.3)

- ア 大変よかった
イ 少しよかった
ウ 変らない
エ かえって悪くなった

にも多くなっている。

。「家族に対して」は「話ができる」ものがほとんどであり、これは昨年度の傾向と全く同じである。

(2) 変容の状態

昨年度に比較して「大変よかった」というものが、幼稚園、小学校、中学校の順に多く、年齢の低いほど好転する様子がうかがえる。(表12)

「少しよかった」とするものも同じように、幼、小、中の順に多く、「大変よかった」ものと合せて、幼稚園92.8%, 小学校73.6%, 中学校71.3%が好転していることがわかる。「よかった」とするものの中には、話ができるようになったものもあるが、まだ話をするところまではいかないが、表情や行動に変化がみられ、明るい展望をもっているという記述も多くあった。

また、「変らない」「悪くなった」というものが、小学校で25.9%, 中学校で28.6%あり、指導の困難さがうかがわれる。

(表13) 行動の特徴 数字は実数, () は%

状態		1 大変よかった				2 少しよかった				3 変化がみられない				4 かえって悪くなった			
校性	行動	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ
		ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ	ア	イ	ウ	エ
小	男	69	5	6	4	2	27	14	21	13	9	1	5	0	0	0	
	女	97	11	9	8	5	49	22	27	25	9	5	7	1	0	1	
	計	166	16	15	12	7	76	36	48	38	18	6	12	1	0	1	
		(100)	(9.6)	(9.0)	(7.2)	(4.2)	(45.8)	(21.7)	(31.8)	(22.9)	(10.9)	(3.6)	(7.2)	(0.6)		(0.6)	
中	男	10	2	0	0	0	4	1	5	0	2	0	2	0	0	2	
	女	25	0	0	0	0	14	4	6	1	3	4	3	0	0	0	
	計	35	2	0	0	0	18	5	11	1	5	4	5	0	0	2	
		(100)	(5.7)				(51.4)	(14.3)	(31.4)	(2.9)	(14.3)	(11.4)	(14.3)			(5.7)	
高	男	79	7	6	4	2	31	15	26	13	11	1	7	0	0	2	
	女	100	(8.9)	(7.6)	(5.1)	(2.5)	(39.2)	(19.0)	(32.9)	(16.5)	(13.9)	(1.3)	(8.9)			(2.5)	
	計	179	14	12	8	4	62	30	52	26	22	2	14	0	0	4	
		(100)	(7.8)	(6.7)	(4.5)	(2.2)	(34.6)	(16.8)	(29.0)	(14.5)	(12.3)	(1.1)	(7.8)			(2.2)	
総	男	122	11	9	8	5	63	33	26	12	9	10	1	0	1	0	
	女	100	(9.0)	(7.4)	(6.6)	(4.1)	(51.6)	(26.3)	(21.3)	(9.8)	(7.4)	(8.2)	(0.8)			(0.8)	
	計	201	18	15	12	7	94	41	50	39	23	17	1	0	1	0	
		(100)	(9.0)	(7.5)	(6.0)	(3.5)	(46.8)	(20.4)	(24.9)	(19.4)	(11.5)	(8.5)	(0.5)			(0.5)	

1. 大変よかった
ア 学級の一員として責任を果す
イ 友人関係がよかった
ウ 行動が活発になる
エ 学習活動が活発になる
2. 少しよかった
ア 表情が明るくなった
イ 友人ができた
ウ 行動がやや活発になる
エ 学習活動がやや活発になる
3. 変化がみられない
ア 無表情である
イ 孤立している
ウ 行動が不活発である
4. かえって悪くなった
ア 学校をいやがるようになった
イ 先生の指示を拒否する
ウ 態度、行動が固くなる

3. 行動の特徴

1年後の行動上の変化をみようとしたものが(表13)である。

①小学校 「大変よかった」もの31については「学級の一員として」や「友人関係」に変化がみられ、「少しよかった」もの91については「表情が明るくなった」「行動が活発になった」などに多くの変化がみられる。

「変化がみられない」40については「無表情」「不活発」などであり、「悪くなった」もの3については「学校をいやがる」「態度、行動が固くなる」など他の面での不適応行動がみられる。

②中学校 「大変よかった」もの2は、いずれも「学級の一員として」の変化がみられ、「少しよく

(表14) 指導の状況

数字は実数, () は%

校	性	指導 状況 (人数)	1 本人に対して				2 学級として				3 学校として		4 家庭	5 他機関	
			(1) 返事、あいさつ、朗読	(2) 基本行動の訓練 教師との接触を多くもつ	(3) 遊び、激励、手伝い 教師との接触を多くもつ	(4) 手紙、日記等 意思の疎通をはかる	(1) 特別扱いしない	(2) 子をつくる、隣席におく 仲だちを頼む、仲のよい 特定の子にせわをさせる	(3) 遊びのグループに誘う 班の一員として配慮する	(4) 適当な係、分担、役割 を与える	(1) 学級全体で配慮 級友の協力	(2) 担任外教師の配慮	(1) 連絡、面談、訪問 家庭の協力を求める	(1) 児童相談所	(2) その他
幼稚園	男	4	1	3	0	0	0	0	0	1	1	0	3	0	0
	女	10	0	8	0	0	0	0	0	5	5	0	9	0	1
	計 (100)	14 (100)	1 (7.1)	12 (85.6)	0	0	0	0	0	6 (42.8)	6 (42.8)	0	12 (85.6)	0	(7.1)
	一次調査 (%)		(12.1)	(54.5)	(0)	(6.1)	(24.2)	(36.4)	(3.0)	(0)	(3.0)	(0)	(21.2)	(0)	(3.0)
小学校	男	69	15	60	6	9	7	29	7	41	31	7	58	2	11
	女	97	20	63	13	12	22	30	11	57	37	3	75	8	12
	計 (100)	166 (100)	35 (21.1)	123 (74.0)	19 (11.5)	21 (12.7)	29 (17.5)	59 (35.6)	18 (10.9)	98 (59.0)	68 (41.0)	10 (6.0)	133 (80.1)	10 (6.0)	23 (13.9)
	一次調査 (%)		(9.2)	(46.8)	(7.3)	(8.3)	(28.4)	(4.6)	(6.0)	(17.0)	(3.2)	(5.5)	(11.5)	(1.8)	(4.6)
中学校	男	10	2	6	1	1	0	7	0	3	8	0	10	0	2
	女	25	7	8	5	3	4	8	5	7	14	0	22	0	5
	計 (100)	35 (100)	9 (27.3)	14 (40.0)	6 (17.1)	4 (11.4)	4 (11.4)	15 (42.8)	5 (14.3)	10 (28.6)	22 (62.8)	0	32 (91.3)	0	7 (20.0)
	一次調査 (%)		(13.6)	(40.0)	(10.2)	(0)	(25.4)	(8.5)	(10.2)	(6.8)	(3.4)	(5.1)	(16.9)	(5.1)	(3.4)
高等学校	男	2	0	1	0	0	0	0	0	1	1	0	1	0	0
	女	2	1	0	1	0	0	2	0	1	1	0	2	0	0
	計 (100)	4 (100)	1 (25.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	0	0	2 (50.0)	0	2 (50.0)	2 (50.0)	0	3 (75.0)	0	0
	一次調査 (%)		(0)	(18.2)	(0)	(45.5)	(18.2)	(0)	(0)	(9.1)	(18.2)	(0)	(9.1)	(0)	(36.4)
総計	男 (100)	85 (100)	18 (21.2)	70 (82.3)	7 (8.2)	10 (11.8)	7 (8.2)	36 (42.3)	7 (8.2)	46 (54.1)	41 (48.2)	7 (8.2)	72 (84.7)	2 (2.4)	13 (15.3)
	女 (100)	134 (100)	28 (20.9)	79 (59.0)	19 (14.2)	15 (11.2)	26 (19.4)	40 (29.9)	16 (11.9)	70 (52.2)	57 (42.5)	3 (2.2)	108 (80.5)	8 (6.0)	18 (13.4)
	計 (100)	219 (100)	46 (21.0)	149 (68.0)	26 (11.9)	25 (11.4)	33 (15.1)	76 (34.7)	23 (10.5)	116 (53.0)	98 (44.8)	10 (4.6)	180 (82.1)	10 (4.6)	31 (14.2)

なった」もの23については「表情が明るい」「行動が活発」になっている。

「変化が見られない」8については「無表情」「不活発」などであり、「悪くなった」もの2については、「態度、行動が固くなる」という緊張状態が見られる。

小・中学校ともに「無表情」「不活発」の状態から「表情が明るくなる」「行動が活発になる」ことを通して、「学級の一員としての責任を果す」ことができるようになり、ひいては「友人関係がよくなる」「学習が活発になる」という過程が推測される。

4. 指導の状況

自由記述されたものを、昨年度と同じ項目で整理した。（表14参照）

(1) 小学校

「本人に対して」では「遊ぶ、話しかけ、激励、手伝いをさせる」など個人的な接触を通してのものが大部分であり、その背後には、「特別扱いをしない」というのがあった。一方では「あいさつ」などの基本的な生活行動の訓練もみられた。

「学級として」は「全体で配慮し、級友の協力」が多く、「グループの一員として」の配慮がそれにつづく、また「仲のよい子」にせわをさせるなどもとられている。

「学校として」は職員が共通の理解のもとに、暖かく接することが重要視されている。児童によっては特殊学級の中で活発になっていく場合もみられる。

「家庭との連絡」では、連絡帳などによる切れ目のない関係がとられている。また、来校してもらって懇談したり、学校での児童の様子と一緒に観察したりしている。

「他機関」との連絡では、「児童相談所」に通所したり、「ことばの教室」に通ったりして、性格、行動を含めての指導、治療がはかられている。

(2) 中学校

「本人に対して」は小学校と同様、「話しかけ、激励、手伝い」などの個人的接触をもつことが多くなされており、「あいさつ、返事」など基本的行動の訓練がそれにつづく。中学校では訓練的なものが多少多くなっている。

「学級として」は、「班の一員として」という、小集団の中での配慮が最も多く、「学級全体での配慮」がそれにつづいている。

「学校として」は「全職員が共通の理解の下で」ということで、教科担任制ということもあって、各教科担任にあっても、同じ姿勢で接することが強調されている。

「家庭との連絡」は、いずれも密接な連絡を強調し、懇談、訪問などがあげられている。

「他機関」との連携は「ことばの教室」「特殊学級への通級」などがあげられている。

5. 類型別考察

(1) 緘黙の状況、程度

昨年度行った類型化を基にして、類型別に状況をまとめたものである。

（表15） 類型別緘黙の状況・程度

数字は実数，（ ）は％

校 群	対人 程度	A 誰に対しても					B 担任に対して					C 友人に対して					D 家族に対して					
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	
小 学 校	I	54 (100)	1 (1.9)	3 (5.6)	2 (3.7)	20 (37.0)	4 (7.4)	4 (7.4)	13 (24.1)	9 (16.7)	29 (53.7)	4 (7.4)	11 (20.4)	9 (16.7)	6 (11.1)	26 (48.1)	5 (9.3)	47 (87.0)	6 (11.1)	2 (3.7)	2 (3.7)	1 (1.9)
	II	27 (100)	1 (3.7)	1 (3.7)	5 (18.5)	10 (37.0)	4 (14.8)	2 (7.4)	10 (37.0)	5 (18.5)	12 (44.4)	1 (3.7)	11 (40.7)	7 (25.9)	3 (11.1)	6 (22.2)	0	24 (88.8)	1 (3.7)	2 (7.4)	0	0
	III	18 (100)	2 (11.1)	3 (16.7)	3 (16.7)	6 (33.3)	1 (5.6)	3 (16.7)	9 (50.0)	2 (11.1)	3 (16.7)	1 (5.6)	5 (27.8)	7 (38.9)	2 (11.1)	2 (11.1)	1 (5.6)	15 (83.3)	0	0	0	0
	IV	67 (100)	5 (7.5)	15 (22.4)	13 (19.4)	13 (19.4)	3 (4.5)	20 (29.8)	19 (28.4)	11 (16.4)	8 (11.9)	0	29 (43.9)	20 (29.8)	9 (13.4)	4 (6.0)	0	56 (83.6)	4 (6.0)	4 (6.0)	0	0
中 学 校	I	12 (100)	0	1 (8.3)	0	5 (41.7)	2 (16.7)	1 (8.3)	2 (16.7)	0	0	0	2 (16.7)	0	0	0	1 (50.0)	8 (66.7)	2 (16.7)	0	1 (8.3)	0
	II	3 (100)	0	0	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	1 (33.3)	0	0	2 (66.7)	1 (33.7)	0	0	0	3 (100.0)	0	0	0	0
	III	5 (100)	0	0	1 (20.0)	2 (40.0)	0	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	1 (20.0)	0	1 (20.0)	1 (20.0)	1 (20.0)	2 (40.0)	0	4 (80.0)	1 (20.0)	0	0	0
	IV	15 (100)	1 (6.7)	6 (40.0)	1 (6.7)	3 (20.0)	0	5 (33.3)	7 (46.7)	2 (13.3)	3 (20.0)	0	4 (26.7)	9 (60.0)	1 (6.7)	2 (13.3)	0	12 (80.0)	4 (26.7)	1 (6.7)	0	0

I 群 「教師，友人に対して全く話さない」

II 群 「教師には全く話さないが，友人には少しは話す」

III 群 「教師には少し話すが，友人には全く話さない」

IV 群 「教師にも，友人にも少し話す」

小学校，中学校ともに同じような傾向がみられるので一緒にしてまとめる。

・ I 群，II 群では「誰に対しても」，「担任に対して」では「話のできない」ものが50％～60％と多く，症状の重さを感じられる。逆にみれば，昨年度「全く話ができなかった」もののうち30％近くが声を出したり，小さい声で話ができるようになってきていることは，好転のきざしもかなりあるということになる。

・ I 群では「友人に対して」も60％に近いものが，「話ができ（表16）変容の状態 数字は実数，（ ）は％ない」状態であるが，II，III，IV群については，「友人に対して」はかなり話ができることがわかる。

・ III，IV群についても，「担任に対して」話ができないものが10％～20％みられる。

（2）変容の状態

各類型別に変化の様子をまとめたのが（表16）である。

・ 「変りがみられない」ものは，I，II，III，IV群の順に多く，それだけI群，II群の重症の様子が推測される。

・ 「大変よくなった」ものは，IV，I群に多い，これは，「話ができるかどうかでなく，表情，行動の変化でもあるから，I群ではその変化が目立つということが考えられる。

校 群	項目	変容の状態			
		ア	イ	ウ	エ
小 学 校	I 54 (100)	9 (16.7)	26 (48.2)	16 (29.6)	3 (5.6)
	II 27 (100)	1 (3.7)	19 (70.4)	7 (25.9)	0
	III 18 (100)	2 (11.1)	12 (66.6)	4 (22.2)	0
	IV 67 (100)	19 (28.4)	34 (50.7)	14 (20.9)	0
中 学 校	I 12 (100)	1 (8.3)	5 (41.6)	5 (41.6)	1 (8.3)
	II 3 (100)	0	3 (100)	0	0
	III 5 (100)	1 (20.0)	2 (40.0)	2 (40.0)	0
	IV 15 (100)	0	13 (86.5)	1 (6.7)	1 (6.7)

（表17-1）類型間の変動（小学校）数字は実数，（ ）は％

54年 53年	I	II	III	IV	計
I	31 (57.4)	4 (7.4)	3 (5.6)	16 (29.6)	54 (100)
II	6 (22.2)	8 (29.7)	1 (3.7)	12 (44.4)	27 (100)
III	3 (16.7)	1 (5.6)	1 (5.6)	13 (72.1)	18 (100)
IV	4 (6.0)	5 (7.5)	2 (3.0)	56 (83.5)	67 (100)
計	44 (26.5)	18 (11.9)	7 (4.2)	97 (58.5)	166 (100)

（表17-2）（中学校）

54年 53年	I	II	III	IV	計
I	8 (66.7)	1 (8.3)		3 (25.0)	12 (100)
II	0	0	0	3 (100)	3 (100)
III	1 (20.0)	1 (20.0)	0	3 (60.0)	5 (100)
IV	2 (13.3)	0	0	13 (86.5)	15 (100)
計	11 (31.4)	2 (5.7)	0	22 (62.8)	35 (100)

（表18）類型別指導の状況 数字は実数，（ ）は％

校 群		对象	本 人				学 级			
		方法	1	2	3	4	1	2	3	4
小 学 校	I	54 (100)	14 (25.9)	37 (68.5)	5 (9.3)	8 (14.8)	9 (16.7)	17 (31.5)	5 (9.3)	35 (64.9)
	II	27 (100)	7 (25.9)	19 (70.3)	3 (11.1)	3 (11.1)	5 (18.5)	9 (33.3)	2 (7.4)	16 (59.3)
	III	18 (100)	8 (44.5)	12 (66.7)	2 (11.1)	1 (5.6)	4 (22.2)	5 (27.8)	2 (11.1)	14 (77.7)
	IV	67 (100)	6 (9.0)	52 (77.6)	9 (13.4)	9 (13.4)	10 (14.9)	29 (43.9)	6 (9.0)	34 (50.7)
中 学 校	I	12 (100)	3 (25.0)	4 (33.3)	3 (25.0)	2 (16.7)	2 (16.7)	5 (41.7)	1 (8.3)	3 (25.0)
	II	3 (100)	0	3 (100)	1 (33.3)	0	0	2 (66.7)	0	1 (33.3)
	III	5 (100)	1 (20.0)	3 (60.0)	0	0	1 (20.0)	1 (20.0)	0	3 (60.0)
	IV	15 (100)	5 (33.3)	9 (60.0)	1 (6.7)	2 (13.3)	1 (6.7)	7 (46.7)	4 (26.7)	3 (20.0)

・「大変よかった」、「少しよかった」ものを合計するとⅠ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ群の順に低い。

(3) 類型間の変化

今年度の回答を基にして、あらためて類型化を行い、昨年度の類型との変化をみたのが（表17）である。

・Ⅰ群では54のうち31（57.4％）のものがⅠ群に留まり、重症の様子を示している。これは、小・中学校ともに同じ傾向を示している。

・Ⅱ群ではⅣ群への変化が最も多いけれども、Ⅱ群そのままⅠ群への変化を合計すると、やはり50％を越える数字になる。

・Ⅲ群，Ⅳ群では、Ⅳ群への変化が大きく、好転率の高いことがわかる。しかし、Ⅰ，Ⅱ群への変化が小学校で13名，中学校で4名と、10％を越えている。

(4) 群別の指導状況

各群別に指導の様子をみると、小・中学校ともに、また各群ともに共通な傾向がみられる。

・「本人に対して」のものでは「声をかける、激励、手伝い」などの個人的接触を中心としたものであり、「返事、あいさつ」などの基本的行動の訓練がそれにつづいている。

・「学級の中で」は、小学校では「学級全体で配慮、級友の協力」が最も多く、次が「班の一員として、遊びのグループに誘う」などである。中学校ではⅠ，Ⅱ，Ⅳ群で「班の一員として」が最も多い。

（表19）Ⅰ群からⅣ群へ変動した児童についての指導状況（小学校のみ）

No	学年	性	本人に対し	学級として	学校として	家庭に対し	他機関	その他
1	1	男	暖いふんい気づくり 声かけ、親近感をもつ	日直の役割、小集団活動	特別扱いせず	よく連絡をとる	ことばの教室	
2	1	男	声をかける、教科書を読む 体育に自信	他の子に待たせる	急がない	母と話し合う		
3	1	男	ことばかけ、発表の機会	仲間に入れるように 特活で話すように		過保護にならない ように		
4	1	男	表情をよく観察した	みんなで話しかける	職員共通の態度	連絡をよく		
5	1	女	大声で話し合う、ほめる	待っている、よくきく		連絡をよく		同じクラス
6	1	女		ほめる				
7	1	女	身体接触、話しかけ 受容	特別扱いしない 学級全体の配慮	しつこくしない	よく話し合う	特殊学級	
8	1	女	常に安定感をもたせる	特別扱いしない、仕事も 同じ、グループの一員	職員共通の態度	連絡を大切に		
9	2	男	毎朝の声かけ、肩、手をつなぐ	友人の家へ遊びに行く		連絡ノート	ことばの教室	
10	2	女	勇気づけ、手足に触れる 忘れ物の指導	ふんい気づくり 自信をもたせる		基本的な生活習慣 の連絡		
11	2	女	手紙の交換、一緒に遊ぶ 手をかける、かまったりする	協同学習の機会を多く、 子ども相互の助け合い		情報交換 家庭訪問		
12	3	男	体を動かすことを中心	なんでも話せるふんい気 黙っていても学級の一員		多くの人と接す るように	特殊学級	遠足で話し かける
13	3	男	本人の話をよく聞く よく説明する	助け合うように	職員が同じ態度で	週1回学校へ	特殊学級	
14	3	男	1日1回は声をかける	一緒に話したり、遊ぶ	教育相談的態度	毎日の連絡帳		
15	5	女	呼名 質問 読み1日1回	級友5人の働きかけ	合唱部参加	毎月1回来校	ことばの教室	

小学校について、Ⅰ群からⅣ群へ好転した16名中15名（1名記載なし）について指導の実際をまとめたのが（表19）である。

○1年生が8名と、半数を占めており、低学年の好転率の高さがみられる。

○本人に対しては、「個人的な接触」を通して、担任とその子どもとの親しい関係をつくることが何よりの基本と考えられる。身体的接触、一緒に遊ぶ、返事がなくとも毎日話しかける、得意なものを見つける、そのためには、まずよく子どもを見る事である。きめられた事を方法としてするのではなく、その子どもと最もよく通じ合うものを探し出すことであろうか。

○学級としてはふんい気づくりを大切にし、皆で焦らないで待つということ、そして子ども同士の助け合いを育てることなどが大切なこととしてあげられる。そのことを通して、子どもは何も話さなくとも学級の一員としての自信が生まれてくるのであろうか。

○学校としては職員全体が共通な理解をもち、同じ態度でその子どもに接することなどがあげられている。教科の担任として、クラブの担任として、それぞれの立場で本人とのかかわりをもつことが、その子どもの行動を広げることになっていく。

○家庭との連絡もまた密接にし、家庭では見られない姿について十分な相互理解がはからなければならないと考えられる。

ま と め

昭和53年度に実施した悉皆調査にあらわれた登校拒否児（271名）と緘黙児（247名）を対象に、1年後の状態について追跡調査を行った。結果を要約すると次のようになる。

登 校 拒 否 児

- (1) 小学校では軽度のものが多く、好転する率も高い。しかし中学校・高等学校になると、中等度・重度が増え、学校への復帰もなかなか困難をきわめている。とくに、高等学校では、その約半数が退学していつている。したがって、小学校時代における根本的解消と、早期の発見・治療が大切となる。
- (2) 好転したきっかけは、小学校では教師の働きかけが大きかったとしている。中学校では、専門機関とのかかわりとするものが多くなり、高等学校では、本人の自覚をあげている。
- (3) 教師の指導態度は、受容的なものが多い。したがって、指導の方針においても本人の立場から考えてやっているものが目立つ。しかし、中学校では、その方針も時により変化をみせ、多岐にわたる。
- (4) 家庭との協力を大切と考え、話し合いを中心としたいとするものが多いが、実際は、時間などの制約で実現した回数は少なく、電話などの連絡で終ることが多いようである。
- (5) 好転したにせよ、今後の見とおしについては、小学校で3割、中学校では4割ほどがまだ不安であると答えている。高等学校では、退学者を除いてもなお1割ほどが不安としている。

緘 黙 児

- (1) 「担任に対して」は小・中学校で約60%のものが「声を出したり、話したり」できるようになった。
- (2) 「友人に対して」は同じく約70%のものができるようになった。
- (3) 「大変よくなった」というのは小学校で18.7%，中学校で5.7%であるが、「少しよくなった」ものを合計すると、小学校で73.6%，中学校で71.3%と多くなる。
- (4) 「よくなった」内容としては「表情が明るくなった」「行動が活発になった」ことから始まり、「学級の一員として責任を果すことができる」ようになったものまである。
- (5) 症状の重いもの（Ⅰ，Ⅱ類型）のものほど好転率は低く、約50%のものが同じ類型（Ⅰ，Ⅱ）に留まっている。
- (6) 低学年の方が好転率が高い。
- (7) 指導の状況については、個人的な接触（スキンシップ、声をかける、体の動きを中心にする）などを基本として、級友の協力によるグループへの参加などによって効果をあげている。
- (8) 学校全体としては、職員全員が共通な理解をもち、同じ態度で接することが大切であると強調する。

延518名に対する追跡調査をまとめるについては多くの先生方から、心からの御協力をいただきました。厚く御礼を申し上げると共に、広く各位からの御批正を賜わりますようお願いいたします。

参 考 文 献

- (1) 小野塚隆他 情緒障害児の指導と治療に関する研究 新潟県立教育センター研究集録第6集 1973
- (2) 小林 勝他 情緒障害児の指導と治療に関する研究 新潟県立教育センター研究報告第29号 1979

秘

登校拒否児に関する個人別状況追跡調査

整理番号

新潟県立教育センター

※ この調査は、昭和54年9月10日現在の状況を記入してください。

学校（園）名 対象児 男 女 生年月日 昭和 年 月 日生

	昭和53年度	昭和54年度
在 籍 学 年		
担任教師氏名		
調査書記入者		

1. 対象児の登校拒否としての欠席は { 現在も続いている { 休学
終わった（終期 年 月 日） { 退学

2. 対象児は昨年度調査時（昭和53年4月～7月）と比較して、どんなようすですか。

※ 該当欄に○印をつけてください。

欠席状況	表情・態度	非常に明るくなった	明るくなった	変わらない	暗くなった	その他
a. ほとんど欠席しない						
b. 欠席は少なくなった						
c. 変わらない						
d. 欠席が多くなった						
e. 全く出席しない						

3. 対象児が昨年度調査時に比較して変わった場合（2のa b d eに該当する者）そのきっかけ、理由と思われるものがあったら書いてください。

{

4. 対象児に対して、どのような指導の手だてを講じてきましたか。

(1) 指導方針や構えとしては

{

(2) 直接的には

{

5. 家庭との協力は、どのようにしましたか。

{

6. 他機関と協力したり、委託したりしましたか。（下表に該当する項目に○印をつけ、必要事項を書いてください）

項 目		機 関 名	期 間
入所（院）	いままでしたことがある		年 月～ 年 月
	現在している		年 月 日 以来
通所（院）	いままでしたことがある		年 月～ 年 月
	現在している		年 月 日 以来
訪問指導	いままでうけたことがある		年 月～ 年 月
	現在うけている		年 月 日 以来

7. 今後の見とおしなど、参考になることがあったら書いてください。

{



緘黙児に関する個人別状況追跡調査

整理番号 _____

新潟県立教育センター

学校（園）名 _____ 対象児 _____ 男 女 生年月日 昭和 年 月 日生

	昭和53年度	昭和54年度
在 籍 学 年		
担任教師氏名		
調査書記入者		

1. 現在の緘黙の程度はどうでしょうか。（対象ごとに○印をつけてください）

	誰に対しても	担任に対して	友人に対して	家族に対して
思うことをだいたい話す				
小声で何とか話す				
返事くらいなら声を出す				
うなずくが声は出さない				
全く反応を示さない				

2. 全体的にみて、現在の状態は、昨年とくらべてどうでしょうか。（該当するものに○印をつけてください。）

ア. 大変よかった イ. 少しはよかった ウ. 変化がみられない エ. かえって悪くなった
オ. その他（今後の見通しなど感じていることを自由に書いてください）
〔

3. 現在の行動の状況は、どうでしょうか。（1） 2） 3） 4）のいずれかをえらび、ア. イ. ウ. エに○をつけてください。）

- 1) 大変よかった

ア. 学級の一員として責任を果たす
イ. 友人関係がよかった

ウ. 行動が活発になる
エ. 学習活動が活発になる
- 2) 少しよかった

ア. 表情が明るくなった
イ. 友人ができた

ウ. 行動がやや活発になる
エ. 学習行動がやや活発になる
- 3) 変化がみられない

ア. 無表情である
イ. 孤立している

ウ. 行動が不活発である
- 4) かえって悪くなった

ア. 学校をいやがるようになった
イ. 先生の指示を拒否する

ウ. 態度、行動が固くなる

4. 現在までに行なった指導について、書いてください。

- 1) 本人に対して 〔
- 2) 学級として 〔
- 3) 学校として 〔
- 4) 家庭に対して 〔
- 5) 他機関との連携 〔
- 6) その他（気づいたことを自由に書いてください）
〔